

いと苦しき運命の籤を引きし  
囚とらはれびと人なり今。

己自らの坑内に

身を屈めて働き乍ら、

汝自らに穿ち入り、

汝自らを埋めながら、

いかにもせん方盡きて、

硬かたばりて、

一の死體——

一百の重荷に壓倒せられて、

汝自らの重みに堪へかねて、

認識する者！

自己を認識する者！

賢きツアラトッストラ！

汝は最も重き重荷を求めき。

備て汝は汝自らを見出しき——

汝は汝自らをふり放ち得ざるべし……

待ちぶせしながら、

うづくまりながら、

もはや直立し得ざるところの者！

汝は汝の墓の中にすらも畸形になり行かむ、

畸形になれる精神よ！……

備て近頃も尙ほ汝の誇りの

あらゆる竹馬の上にさばかり誇りかに！

近頃も尙ほ神なき隠遁のひとり者、

悪魔ともなるふたり者、

あらゆる慢心の深紅の公子！……

詩

今——

三の皆無の間に  
身を曲げて、

一の疑問符、

一の退屈なる謎——

肉食鳥にとりての一の謎……

——彼等はまことに汝を「解決」せむ。

彼等は既に汝の「解決」に飢え、

既に彼等の謎、汝のまはりにはばたけり、

絞殺されたる者、汝のまはりに！

嗚呼ツアラトウストラよ！

自己認識者よ！

自己處刑者よ！

第三

太陽は沈む

汝は更に久しく渴くことなかりき、  
焼き焦がされたる胸よ！

約束は空中にあり、

知られざる口より我が方へ吹く

——大なる涼しさは来る……

我が太陽は正午時に於て我が上にあつまりき。

汝等が來ることの慶ばしきかな、

汝等突然の風よ、

汝等午後の涼しき精神よ！

空気はめづらかに又清らかなり。  
誘惑者の  
横目遣ひをもて夜は、  
我を偷視せざりしか？  
強きを失はされ、我がけなげなる胸よ！  
「何故！」を問ひたづねされ！

二

我が生の日よ！  
太陽は沈む。  
既に平滑なる潮は鍍金されたり。  
温く岩は息づけり。  
その上に幸福は善く  
眞晝に於て其眞晝の眠りを眠りしか？  
緑の光の中に、  
幸福は尙ほ褐色の深潭より湧き来る。

我が生の日よ！  
夕暮はせまる！  
既に汝の目は  
半ばめしひて燃え、  
既に汝の露は  
涙のしづくを流し、  
既に汝の白き波の上にも  
汝の愛の深紅は走る、  
汝の最終のためらへる福祉は……

三

金色の朗らかさよ、いざ！  
汝死の  
最も秘密なる、最も甘き豫感よ！  
我は餘りに速く我が道を走りしか？

足の疲れたる今こそ

汝の目も我を捕ふるなれ、

汝の幸福も我を捕ふるなれ。

あたりは波と戯れとのみ。

重かりしほどの物は

青き忘却の底に沈みて――

なすこともなく今我が小舟は立てり。

暴風雨及び航海を、いかに彼の忘れたるかな！

願望及び希望は溺れ死に

魂と海とは穩かにあり。

第七の寂寥よ！

甘き確實さを我により近く、

太陽のまなざしをより温く、

我が感じたることはなし。

我が頂上の氷の尙ほ燃えたらすや？

銀色に、軽やかに、一の魚は、

我が扁舟は今泳ぎ出づ……

#### 第四

最終の意志

我が曾つて彼の死するを見し如く、

その如く我は死せむ――

我が暗き少壯時代に

神の如く電光を投げ入れしかの友は、

ほしいままにして、しかも深く、

戦鬪の間に於て舞踏者なりき。

戦士等の中に最も快活なる者として、

勝利者等の中に最も沈鬱なる者として、  
その運命の上に一の運命として立ち乍ら、  
毅然として、後に前に思慮ぶかく——

彼の勝ちしことにつきて戦慄しはじめ乍ら、  
彼の死に行きつつも勝ちしを歡呼し乍ら——

死の中にありて命令し乍ら

——しかも彼は、人の剿滅せむことを命じき……

我が會つて彼の死するを見し如く、

その如く我は死せむ——

勝ちながら、剿滅しながら……

## 第五

蜂 火

海の間には生ひ立ち、

犠牲の岩と聳ゆるところ、

ここにして暗々たる天空の下に、

ツラトッストラは其高キ火を點す——

吹き流されたる水夫にとりては水路標、

答へを有てる者等にとりては疑問標……

灰白の腹をもてるこの焰は、

冷き遠方に其貪慾の舌をはき、

愈々清純なる高處へその頸をまぐ——

げに、苛立たしさに立ちし蛇、

この信號を我は我が前に置けり。

この焰こそは我が魂その物なれ。  
新しき遠方にあくことを知らず、  
上に上にと其熱は燃えのぼる。

如何なればツラトッストラは獸と人とを逃れしか？  
如何なれば彼は總ての陸地を慌だしく走り去りしか？

第六の寂寥を彼は既に知れり——

されど海その物も彼にとりて十分に寂寥ならざりき。  
島は彼をのぼらしめ、山の上に彼は焰となりぬ。

第七の寂寥を求めて彼は今  
その頭を越えて釣針をなぐるなり。

吹き流されたる水夫等！ ふるき星の屑！

汝等將來の海！ 究められざる天！

總ての寂寥へ我は今釣針を投ぐ。

焰のいらだちに答を與へよ、

高き山の上なる漁人我に、

我が第七の、最終の寂寥は捕へられよかし！

## 第六

名聲と永久性

如何に久しく汝は既に

牝鳥の如くして汝の災禍の上に坐したるか？

心せよ！ 汝は我が尙ほ一の卵をかへさむ、

汝の久しき悩みより一のバジリスクの卵を。

いかなればツラトッストラは山に沿うて忍び行くか？

疑ひ深く、腫物の如く、陰惨に、

一人の久しき埋伏者——  
されど突如として一の電光、  
明るく、恐ろしく、  
深潭より天への一打撃。  
山その物へ内臓は胴震ひす……

憎しみと稻妻の光との  
一に、一の呪詛になる處、  
山上に今ツラトッストラの怒は蟠り、  
一のあらし雲として彼はその道を忍び行く。

一の最終の屋根を有する者等は寢床へ、  
汝等自らと共に忍びかくれよ、汝等柔弱者！  
今雷は穹窿の上を轟き渡り、  
今用材と壁をなせるものとは打ち震へ、

今電光と硫黄色の眞實とは閃めく——  
ツラトッストラは呪詛するなり……

二

總じて世間の支拂ひに用ふる  
この貨幣、名聲——  
手袋をはめて我はこの貨幣を扱ひ、  
嘔吐感をもて我はそれを我が下に踏む

何人か支拂はるることを欲するや？  
買はるべき人々……  
賣物になれる者は、……  
肥え太りたる手を……  
この世上の薄つべらなる名聲へさしのぶるなり。

汝はそれを買はむと欲するや？

それは悉く皆買はるべきもの。

されどよき値をつけよ！

錢入を一杯にして鳴り響かせよ！

しからされば汝はそれを強くせむ。

汝はしからさればその徳を強くせむ……

それは悉く皆有徳なり。

名聲と徳とは、互に相和せり。

この世間のある限り、

徳のべちやくちやは、

名聲のぶつぶつをもて支拂はる。

この世間は此の喧噪に生くるなり

あらゆる有徳者の前に

我は罪過あることを、あらゆる

大なる罪過あることをねがふ！

總ての名聲の呼子の前に、

我が覇氣は蟲けらとなる——

此の如きものらの間にありては、

最も低劣の者たること我が熱望なり……

總じて世間の支拂ひに用ふる

この貨幣、名聲——

手袋をはめて我はこの貨幣を扱ひ、

嘔吐感をもて我はそれを我が下に踏む。

三

静かにせよ！

偉大なる事物より——我は偉大さを見る！

人は黙するか、然らずんば、

偉大なる言葉を口にすべきなり。



偉大なる言葉を口にせよ、我が狂喜せる叡智よ！

我は見上ぐ——

その處に、光の浪は逆巻けり。

嗚呼夜、嗚呼沈黙、ああ死の如く靜かなる喧噪よ！

我は一の標徴を見る——

いと遠き遠方より

徐ろに火花を散らしつつ一の星は我に落ち來る。

四

存在のいと高き星！

永久の彫刻せられたる價值の表！

汝は我に來るや？

何人も見しことなきもの、

汝の默然たる美しさは——

如何に？　そは我がまなざしを逃れ去らずや？

必然さの盾！

永久の彫刻せられたる價值の表！

されど汝は固よりこれを知る——

總ての憎惡するところのもの、

ただ我ひとり愛するところのもの、

——汝が永久なることを！

汝が必然なることを！

我が愛は永久にただ

必然さによつてのみ燃え立つなり。

必然さの盾！

存在のいと高き星！

——いかなる願望も到達せざるもの、

——いかなる否も汚し得ざるもの、

偶像の證明

存在の永久の然り、

永久に我は汝の然りなり。

嗚呼永久性よ、我は汝を愛するなれば！

六一〇

—了—



◀ 明 薄 の 像 偶 ▶

大正十五年十一月一日印刷  
大正十五年十一月八日發行

(定價參閱)

著 作 者

生 田 長 江

發 行 者

佐 藤 義 亮

東京市牛込區矢來町三番地

發 行 所

新 潮 社

社

電話牛込  
八八八八  
〇〇〇〇  
九八七六  
番番番番

番二四七一(東京)替換

印 刷 所

東京市小石川區西江戸川町  
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

生田長江氏譯  
ニイチエ全集

□第一編 人間的 <small>な餘りに</small> 人間的 <small>な</small> (上) 定價貳圓五拾錢 送料拾八錢	□第二編 人間的 <small>な餘りに</small> 人間的 <small>な</small> (下) 同	□第三編 黎 明 同	□第四編 悦ばしき智識 同	□第五編 ツアラトウストラ 定價貳圓八拾錢 送料拾八錢	□第六編 善惡の彼岸。道德系譜學 同	□第七編 權力への意志 (全二冊) 定價貳圓五拾錢 送料拾六錢
---	---	------------	---------------	-----------------------------	--------------------	---------------------------------

■ツアラトウストラ解釋並に批評 阿部次郎氏著  
— 定價壹圓貳拾錢、郵送料八錢 —

■思想・文藝・講話叢書

四六版洋布・紙數約五百頁  
但(一)は貳圓(二)は貳圓(三)は貳圓(四)は貳圓(五)は貳圓(六)は貳圓(七)は貳圓(八)は貳圓(九)は貳圓(十)は貳圓(十一)は貳圓(十二)は貳圓(十三)は貳圓(十四)は貳圓(十五)は貳圓(十六)は貳圓(十七)は貳圓(十八)は貳圓(十九)は貳圓(二十)は貳圓

(1) 近代思想十六講 中澤長江著	(11) 東洋思想十六講 高須芳次郎著
(2) 社會問題十二講 本生久雄著	(12) 歐洲繪畫十二講 伊達俊光著
(3) 近代文藝十二講 生田長江・森田草平・野上白川・昇曙夢著	(13) マルクス十二講 高島素之著
(4) 近代劇十二講 楠山正雄著	(14) トルストイ十二講 昇曙夢著
(5) 改造思想十二講 宮島新三郎・相田隆太郎著	(15) 東洋文藝十六講 高須芳次郎著
(6) 近代世文學十二講 高須芳次郎著	(16) 獨逸文學十二講 三井光彌著
(7) 現代文學十二講 高須芳次郎著	(17) 進化思想十二講 小栗慶太郎著
(8) 小説研究十六講 木村毅著	(18) 經濟思想十二講 安倍浩著
(9) 婦人問題十六講 奥うめお著	(19) 世界宗教十六講 相田隆太郎・木村毅著
(10) 社會學十二講 杉山榮著	

— 以下續々刊行 —

マルクス著 高島素之氏譯

# 改譯 資本論

安部磯雄氏曰く、「十年、二十年の深い研究を積んだ上での立派な、良心的な、そして充分の信頼に値する翻譯と言へば、日本では坪内さんの『シエークスピア全集』と、高島君の『資本論』と、この二つ丈だと思ふ。」

マルクスの『資本論』は、有史以來、人類の科學的勢力が産出した最大傑作の一つである。刊行六十年にして、時代の生命を現實的に燃熱し、時代の思潮を樞軸的に回轉せしめたもの。マルクスの『資本論』の如きは、固より稀である。而も『資本論』は、論旨深遠にして行文難解を以つて聞え、これを眞に理解せんとすれば、豊富なる原語の素養に加ふるに、克明なる思想の鍛錬を以つてしなければならぬ。譯者はマルクスの研究に於て良心的權威に叩頭する所の第一人。曩に滿六ヶ年の全身の没頭を以つて『資本論』全三卷一萬枚を譯了したが、震災のため舊版紙型の焼失せるを寧ろ好機として、新たに全部の改譯を企て、舊版の難澁なる筆致をば、科學的嚴正を傷けざる限り、茲に全部理解し易き日本文に書き改められた。難解の外國文を轉じて、翻譯臭味なき邦文の『資本論』を完成せるは、眞に學界の一大偉業として激賞讃嘆せられた。

製上最皮背版菊

第一卷	第二卷(上)	第二卷(下)
紙數千五百五十頁 定價八圓五拾錢 書留小包卅六錢	紙數六百二十頁 定價五圓五拾錢 書留小包卅六錢	紙數六百頁 定價五圓五拾錢 書留小包卅六錢

## 社會新學說大系

北 高島素之氏共編

— 中版背布特製・各册貳百五拾頁・定價各壹圓貳拾錢・送料各拾錢づゝ —

(1) 唯物史觀の改造	巴拉ノブスキ 高島素之譯述	(11) プラトン理想國	プラト 津久井龍雄譯述
(2) 社會學的認識論	ホフマン 宮崎市八譯述	(12) 實踐理性批判	カ 高井篤譯述
(3) 時間と自由意志	ベルグソン 北吟吉譯述	(13) 財産の進化	ラ 高島素之譯述
(4) 田園・工場・仕事場	クロポトキン 中山啓譯述	(14) 科學と臆說	ホ 村井正巳譯述
(5) 富國論	ス 神永文三譯述	(15) 遺傳法則論	メ 高井篤譯述
(6) 社會生活と精神生活	オ 高橋正熊譯述	(16) 機能的社會國家論	コ 石川準十郎譯述
(7) 社會學通俗教科書	ギ 神永文三譯述	(17) 判斷力批判	カ 齊藤要譯述
(8) 政黨心理の研究	ミ 西村二郎譯述		
(9) マルクス經濟學入門	カ 石川準十郎譯述		
(10) 社會學の思想 人生的價值	ス 高島素之譯述		

— 以下續々發行 —

早稲田大學文學部内 文學思想研究會編

# 文學思想研究

(毎年二回發行)

早稲田大學文學部の哲學、文學、史學の三學科、その各學科を區分する夫々の十二專攻學科に關係する人々によつて組織された「文學思想研究會」の協同綜合の研究發表機關として、「文學思想研究」を發行することとなつた。學界の權威たる諸家が、其蘊蓄の總てを傾け、之を講話的形式に託せるもの、即ち公開せられたる大學講座である。

編輯委員  
五十嵐 力 西村眞次 横山有策  
吉江喬松 武田豊四郎 伊達保美  
山岸光宣 煙山專太郎 日高共一  
關 與三郎

## 第一卷内容

ハ、デイの自然觀 日高只一  
現象學的歸結と妥當性 金子馬治  
認識論的宗教哲學に就て 河面仙四郎  
日本に於ける羅馬加信仰傳承 西村眞次  
印度劇の起原及び發達 武田豊四郎  
萬葉集雜考 窪田通治  
佛蘭西古典悲劇研究序説 吉江喬松

## 第二卷内容

佛蘭西歴史及思想セルトの源流 メタクサ夫人  
蕭 慎 考 津田左右吉  
アルフレッド・ドゥ・ヴィニイ 小林龍雄  
ウイリアムズの宗教論 伊達保美  
「西風賦」の詩想及位相 日夏耿之介  
サルダナパールの最期 坂崎 坦  
トルコ革命について 煙山專太郎  
問答物語としての「大鏡」 五十嵐 力

## 第三卷内容

ラスクの「判断論」に就いて 田中王堂  
元祿時代の歌舞伎劇 黒木勘藏  
美術研究法に就て 紀 淑雄  
印度劇起原及び發達 武田豊四郎  
オイレンベリクの戯曲 山岸光宣  
近世英文學上の唯美派運動 本間久雄  
近世哲學に於ける認識問題 小山甫文  
ロシア文學のゴゴリ時代 岡澤秀虎

◆ 各刊四百五十五頁・各價貳圓八錢・送料一册拾貳錢 ◆

375  
3

終

